

あしたの教育を考える

教育最前線

Education Vanguard

第6号

「特集」

SDGs

未来をつくる 学校教育

実践報告

山本崇雄 (&総論)

新渡戸文化学園英語科教諭

増田有貴

村上市立荒川中学校教諭

坪内昌子

京都市立高雄小学校校長

JICA地球ひろば見学レポート

谷口友隆

相模原市立大野南中学校総括教諭



【三省堂の歩み】

英語教科書・学参とSDGs

SDGs 達成のための 当事者を 育てるために

山本崇雄

(新渡戸文化学園英語科教諭)

○ 未来を作る子どもたちの意識

日本財団が2019年9月下旬から10月上旬にて行った「18歳意識調査」¹⁾の結果は衝撃的なものでした。この調査ではインド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国、イギリス、アメリカ、ドイツと日本の17〜19歳各1000人を対象に国や社会に対する意識が調査されました。

この中で、「自分で国や社会を変えられると思う」と答えた日本の17〜19歳は18・3%と全体の1/5にも達していません。「自分の国に解決したい社会課題がある」の回答も46・4%と他国に比べ30ポイント近く低い数字となっています。社会課題がよく

わからないから、そもそも解決しようとも思わない、または社会課題は分かっているでも自分で変えられるとは思っていないということでしょう。そう考えると、学びを社会課題につなげることができていない学校現場はこの結果を重く受け止めなければなりません。

2015年に全国連加盟国で合意されたSDGs（持続可能な開発目標）は世界の社会課題を解決するための目標ですから、この「18歳意識調査」の結果はSDGsの達成にも大きく影響します。

SDGsの認知度に視点を移してみましょう。朝日新聞が、東京・神奈川に住み、調査会社のウェブアンケートに登録している15〜69歳、3000人を対象に2019年8月1、2日にかけてネットを通じて行った調査²⁾では、「SDGs」という言葉を聞いたことがありますか」という質問に対して、「ある」が27%でした。年代別に見ると「15〜29歳」は31%とすべての世代よりも高い結果になっているものの、SDGsの認知度はまだまだ高いとは言えません。生徒たちがSDGsなどの社会問題を自分ごと化し、当事者意識を持つために学校現場で求められる教育とは何でしょうか。

○ SDGsを教えることの難しさ

SDGsが少し遠い存在だったとしても、気候変動やフードロスなどは事実として実感することが多くなりました。昨年の台風19号による交通網、住宅、工場、農業などビジネスへの破滅的な被害は、私た

ちの生活にはつきりと影響を与えています。被害が目に見えるものになっていくにも関わらず、社会課題やSDGsへの関心が高まらないのはなぜでしょうか？

このことは、最近、SDGs関係の講演や記事から感じられる違和感と関連があるのではと思っています。それは、専門家が目を覆いたくなるような事実を訴え、逃れようのない現実が上から降ってくるような感覚です。生徒にとって気候変動の専門家というとちょっと離れた存在で、講演の内容は理解できても、当事者意識をすぐに持つことは難しいと感じます。その中で行動している生徒は、一部の特別な生徒である印象も生まれています。

ですから、矛盾して聞こえるかもしれませんが、SDGsについて教えようとすればするほど、子どもたちはSDGsを自分ごと化するのが難しくなるのです。教師の役割が、専門家と同じように、「情報を教える」で終わってしまったら、子どもたちを当事者にすることはできません。事実を伝えるだけでなく、問題を共に考え、解決への当事者になっていくプロセスを作ることが重要です。

○ SDGsの合意形成のプロセスを教育に

SDGsは、たとえ戦争状態にあっても、宗教的な対立があっても、文化や人種が違ってても、国連加盟国193カ国すべてが合意して決められました。このプロセスこそ、子どもたちを当事者に変えるヒントです。

通常、国連の方針などの策定は、政府や国連の代表、専門家などを中心に議論を進めて決められ、その方針は、いわばトップダウンで私たちのところへ降りてきます。

一方、SDGsは、トップダウンで決められたものではありません。約3年間かけて世界中の人の意見を集め、議論をオープンしながら決められました。議論の主導的役割を果たしたと言われている国連オープンワーキンググループ(OWG)での議論はインターネットで公開されています(<https://sustainabledevelopment.un.org/owg3.html>)。その中で、OWGの2ndセッション(2013年4月実施)では、Twitterのアカウントが示され、誰でもOWGの参加者に質問をすることができました。また、国連広報センターのウェブサイトによると、『国連の「マイ・ワールド」調査³には、全世界から延べ700万人を超える参加がありました』とあります。このように議論のプロセスでは、オンライン調査以外にも含め約1000万人以上が意見を出したと言われています。

つまり、世界中の人々が、自由に意見を投げ、合意点をきりながら議論をし、ボトムアップで作られたのがSDGsなのです。この合意形成のプロセスこそ、生徒たちをSDGsにつなげ、当事者にするための鍵となります。つまり、生徒たちが身近な「困った(問題)」を自ら「発見し」、「解決したいこと(目標)」を対話を通して合意形成していくプロセスを経験させていくことが、SDGsを自分ごと化することにつながるのです。

● 今の自分から実現したい社会へ

今の自分(たち)をA地点、SDGsを達成し、実現したい社会をB地点とします。A地点からB地点へ向けて当事者として行動していくためには、今の自分をメタ認知し、自分の特性を肯定的に捉えるA地点を作ることがすべてのベースになります。

日本の教育は、特にテストなど認知的に「できないこと」はダメであるという風潮があります。認知能力だけでなく、目標に向かって頑張る力、他の人とうまく関わる力、感情をコントロールする力といった非認知能力も同等に大切にし、自分のできないことも含め、ありのままの自分を肯定することからA地点は始まります。認知的にも非認知的にもできないことがあっていいのです。できないことがあるからこそ協働する意味が生まれます。

生徒一人ひとりがメタ認知し、「困った(問題)」を解決するために自分に何ができるのか、誰に頼ればいいのか、という話し合いを重ねながら共通の目標を探っていきます。これがB地点となります。A地点からB地点に行く道筋に、様々な関わりのある人々(ステークホルダー)と協働して目標を達成していくことを、授業や様々な活動で経験していくことが大切です。

少しずつ視点を広げて、学校や地域社会の「困った(問題)」を発見したら、困っている当事者に生徒をつなげます。例えば、学校のゴミの分別に問題を見つけて、「ゴミを分別しやすいゴミ箱のデザインコ

ンテスト」を学校で実施したとします。この経験を地域に広げたら、学校周辺のコンビニなどのゴミ箱の調査をしたり、店員さんにインタビューをして問題を発見したりして、「ゴミ箱のデザインコンテスト」を地域に広げていくイメージです。A地点が、学校の外のB地点へと広がっていきます。

さらにB地点への矢印を伸ばしていくと社会課題が見えてきます。SDGsは、世界の社会課題につながる窓とも言えるので、個人から地域へ、そして世界へと視線をつなげることができます。ボトムアップの合意形成のプロセスを経て、世界に視線が届いた時、「自分で国や社会を変えられると思う」当事者が増えていくと考えています。生徒たちの今を大切にし、SDGsへ伸びていくベクトルを大切にしましょう。



*1 第20回18歳の意識調査「テーマ：社会や国に対する意識調査」
 *2 SDGs認知度調査第5回報告
 *3 MY WORLDは市民一人ひとりの声を聴くためのグローバルな市民調査です。持続可能な開発目標(SDGs)が策定される前に、およそ1000万人もの声が世界194カ国から寄せられました。(国連広報センター)

新渡戸文化学園英語科教諭、横浜創英中高教育アドバイザーの他、日本パブリックリレーションズ研究所など複数の企業でも活動。公立中高教員を経て2019年度より現職。講演会、出前授業、執筆活動を精力的に行っている。英語検定教科書編集委員、主な著書に『「教えない授業」の始め方』(アルク)他

PROFILE

生徒は、「英語を使って何をしたい?」「英語を学ぶ目的は?」と言われても何も書くことはできなかった。

そこで、英語を手段として世界が広がる体験をさせていくことが重要になる。今年度は、インドの同世代の子どもたちとインターネットのビデオ会議システムを使って、共同授業を行うことから始めた。ここで、片言でも英単語をつなげることでコミュニケーションができる喜びを知る。同時に、言いたいことが伝わらない、相手の言っていることがわからない経験もする。「どうしたい?」と投げかけると「自己紹介ができるようになりたい」が生まれた。挨拶や名前を言う表現や好きなことを言う表現を調べながら、自然と辞書や教科書を開いている。これが、目的に向かった自律した学びの第一歩だ。

このように、学びの目的が明確になると生徒たちは自律的に学んでいく。他にも、英語の動画や英字新聞、絵本などを使い、英語が分かると面白い、世界が広がっていくという体験をさせていく。これらが英語を学ぶ目的を考えるきっかけとなる。

○ 英語の学びをデザインしていく

デザインシートのB地点は「実現したい未来」なので、SDGsの達成が大きく関わってくる。総論で書いたように、SDGsは一方的に教えるものではなく、子どもたちが身の回りの問題から、SDGsにつながる、社会課題につなげていく気づきが重要だ。自分の身の回りの関心が、世界の課題につながって初めて、SDGsを自分ごと化することができる。そこで、関心のあるSDGsのゴールのロゴをデザ

インシートに貼ると、世界の課題が、今の学びにつながっていることを実感できる。

今は月に1回程度、フィリピンの同世代の子どもたちとインターネットで繋ぎ、SDGsをテーマに共同で授業を行なっている。ここでは、お互いの自己紹介から始まり、3学期には「関心のあるSDGsのゴールとその理由」を伝え合うところまで表現は広がっていった。中学1年生ながら、全員、SDGsに関して自分の言いたいことを伝えることができ、フィリピンとの違いなどを英語で理解することができた。国が違っても、考え方も異なるが、SDGsという共通の目的を持つことができることも実感しているようだ。無理やり教科書を進める授業からは、この経験は生まれなかったと思う。

このような経験を通して、各自のデザインシートをアップデートしていく。「英語を使ってやりたいこと」が増えていくにしたがって、より自律的に学べるようになる。最初は「英語は無理」といってデザインシートに何も書き入れられなかった生徒からも、今や「英語で世界の同世代100人と話したい」が生まれるまでになった。A地点からB地点に進んでいく矢印を意識して、常に目的と学びの手段を考え、より良い方向に進んでいく生徒を育てたい。

○ 英語教師の役割

SDGsを達成し、よりよい未来を作っていくために英語の授業でできることは何か。こう考えると、英語教師の役割は、もはや、予定調和に教科書を教えることではない。生徒が今の自分(A地点)から

実現させたい未来(B地点)へ

どう学びをデザインするかを支援することが授業のベースになる。生徒が関心のある社会課題をSDGsのゴールに結びつけられたら、そのゴールに関わ

る動画*や資料をGuiding Resource(ガイドする資料)として生徒に提供し、教科書の学びに紐付けることで、情報を得る手段として英語を使う経験をさせることができる。海外とインターネットで繋ぐ授業やALTとの授業ではよりよい未来をつくるためのコミュニケーションを楽しませたい。国や文化が違っても、よりよい未来のために協働できることを経験させることは、より多様化する世界では重要だ。これらを基本に、授業を計画し、情報を得たり、コミュニケーションをはかったりするために、さらに単語を学びたい、文法を学びたいという循環を作っていくことが重要だ。単語や文法を学ぶことがテストのためにならないようにしたい。SDGsを達成し、よりよい未来につながる英語授業を作っていきましょう。



*SDGsに関する動画は「SDGsTV」(<https://sdgs.tv>)がゴールごとに動画が検索でき便利。動画のほとんどは英語。

SDGsを 軸とした 多様な 学び場づくり

増田有貴

(村上市立荒川中学校教諭)

○ 総合学習で “Think Globally, Act Locally”

生徒がSDGsを身近な『自分ごと』として捉え、「自分たちが社会を変える力になる」と実感することを願い、「新潟から発信！SDGsの視点で、グローバルな生き方を学ぼう」荒川地区で起業した古林さんの講話と新潟巡検での取材を通して「をテーマに、年間を通してSDGsを軸とした学びを展開した。

1年生の総合的な学習の時間の学習内容は下の表の通りである。初めにSDGsの視点から、2030年の世界や地域について考えた後、諸外国と自分の相互依存を考えた。地域学習や新潟巡検に繋げるために、「世界の諸問題は他人事ではない。私たちの身近なことにも繋がっている。SDGsは誰もが参加できる枠組で、新潟市、荒川地区にもSDGs

に貢献する取組をしている人はたくさんいる。それらを学ぶ1年にしよう」と投げかけた。

○ 新潟巡検×SDGs

次のようなねらいから、新潟市内各所を訪問して学習する、新潟巡検を行った。

(1) SDGsを視点として、環境・経済・社会等、身近な地域の問題について課題意識をもち、インタビュー活動や見学を通して、それらについての知見を得る。

実施時期	小単元名	学習内容
6月中旬	2030年の世界と地域を考える	持続可能な社会の実現のために大切な視点(SDGs)を学ぶ。SDGsの視点で2030年の世界と地域を考える。
6月下旬	諸外国と自分の相互依存について知る	『モノはどこからきているの?』カードゲーム(JICA)を通して、世界と自分との繋がりを知る。
7月上旬	荒川地区の「今」を知る	地域住民から、荒川地区の魅力や課題、現在の草の根の取組、中学生への願いなどを聞き、中学生として何ができるか考える。SDGsの視点で、荒川地区を見つめ直す。
7月中旬	地域住民からグローバルな生き方を学ぶ	Iターンとして荒川地区に移住した古林拓也さんより、地域のリソースを活かしたビジネスモデルを聞き、持続可能な社会の実現のための視点を学ぶ。
11月下旬	新潟巡検×SDGs SDGsに繋がる様々な取組を学ぶ	班ごとに、新潟市の企業や団体、お店などを訪問し、インタビュー活動を通して、SDGsに繋がる取組の実際や成果、課題、経営者の願いなどを学ぶ。
12月～2月	まとめ学習	新潟巡検のレポート作成、発表会等

1年生 総合的な学習の時間 単元の指導計画

(2) 課題解決のために、SDGsに繋がる取組を実践する人々の考え方や生き方、取組の実際などを知り、自らの行動に活かしたり、自分ができる社会貢献について考えたりする。

(3) インタビュー活動や見学を通して、新潟市の文化・産業・行政・歴史に触れ、持続可能な生き方や多様なビジネスモデルの視点を学び、今後の学習や卒業後の進路選択に活かそうとする。

巡検当日までの準備と学び

● 8月下旬～9月

【事前準備】新潟市環境政策課に本巡検の趣旨説明をし、訪問先について相談した。並行して、週末に新潟市内で開催されたESD関連のイベント等に参加し、開催者や関係者に訪問先の依頼をした。承諾いただけたところを元にテーマを設定し、訪問先候補リストも作成。

● 9月13日

【総合学習】1学期の振り返りと新潟巡検×SDGsのねらいと概要を説明。生徒は27のテーマから、班で話し合いながら選び、最終的に18のテーマに絞った。

● 9月～10月

【事前準備】訪問を希望する機関や企業に、授業の趣旨や活動内容を説明した。問い合わせ先は40件のほり、最終的には34件から訪問を承諾していただいた。積極的に協力を申し出てくださった訪問先が多く、SDGsへの社会的関心の高さを実感した。

● 9月下旬～11月

【総合学習】班ごとに、テーマや訪問先について調べ学習を行った。訪問先の概要やSDGsに関する取組をまとめるとともに、質問事項を作成した。その後、学年でプチ発表会を行い、班の訪問目的を全員が語れるように準備した。自分の班以外のテーマについても共有され、多様な視点から考えるよい機会となった。

● 11月22日

【新潟巡検当日】中学校の最寄りの坂町駅から新潟駅まで学年全員で移動。その後、新潟駅を発着として9時から15時20分まで、各班に分かれて企業やお店、団体等を訪問した。移動は公共交通機関を利用して生徒のみで行った。目的地までの移動方法も、生徒が事前に自分たちで調べた。

○ 新潟巡検×SDGsが多様な学び場に

新潟巡検では、訪問先の各担当者の方々が、生徒が事前に用意した質問事項をもとに、SDGsに絡めて丁寧に説明して下さった。また、ワークシOPP、工場見学、アート巡り、ラジオ出演、エネルギーづくり実験など、様々なプログラムも用意して下さった。

「教育・芸術×SDGs」平和で公正な社会を当たり前に「コースでは、共生社会の実現に取り組んでいる大学と企業を訪問。大学では、知的に障がいをもった学生一人ひとりのニーズに沿って学習を提供する多様な教育のあり方を学び、企業では、障がいのある方たちのアート展示を通して、街を彩り

ながら、障がい者の社会的自立を創造する活動について伺った。

「水辺からはじまる生態系ネットワーク」水辺の生物について「コースでは、福島潟を会場に、阿賀野川流域を舞台とした環境学習の運営団体の方より、水俣病の背景について開発と環境の側面から学び、今後の生活のあり方を考えた。その後、自然と文化の情報発信施設であるビュー福島潟の管理者の方から、福島潟を案内していただきながら生物の多様性や自分たちができる環境保全について学びを深めた。

「省エネハウス×SDGs」日本エコハウス大賞受賞の要因を探れ「コースでは、2018年日本エコハウス大賞を受賞したお宅を見学しながら、工務店の社長より、工夫を凝らした断熱法や省エネの仕組について伺った。その後、電力会社を訪問し、水力発電や風力発電の仕組を疑似体験で学びつつ、各発電方法のメリットとデメリット、世界と日本の電気利用の比較など学習した。

その他にも、女性が働きやすい環境の整備や、食品ロスの活用、地球温暖化対策のカーボン・オフセット、気候変動に対する防災、環境に負荷のかからない印刷技術など、18班が多岐に渡った学びを得ることができた。

○ 巡検で学んだことを伝え合う

巡検後、レポートを作成した。大まかな内容は①訪問先の概要（SDGsとの関連等）、②質問に対する回答、③特に心に響いた言葉、④新潟巡検を終

えた感想、⑤「SDGsの達成」を目指して取り組みたいこと、の5点である。関連するSDGsは生徒がそれぞれ選び、理由と共にロゴを貼付した。例えばフードバンクを訪問した生徒は、食品ロスを減らすことはCO2排出量の削減にも繋がると知り、ゴール2や12に加え、13も関連すると考えた。また、途上国へ国際協力活動を行なっているNGOとフェアトレード店を訪問した生徒は、「途上国と日本がパートナーとして協力し合っている」ことを学び、ゴール17を選んだ。訪問を通して生徒の視点からSDGsで意味づけを行うことは非常に面白かった。巡検後、「訪問先での学習内容を更に調べた」「生活の中で意識するようになった」、「授業で今回の学びが活きている」など様々な感想を生徒から聞くことができた。SDGsに取り組む当事者の想いや願いが生徒の心に響き、その後の行動や学習に繋がられたのは大きな成果である。今後は、このレポートをポスター代わりに4分間のプレゼン大会を実施する予定である。「つかみ」はどうするか、最後のコアメッセージで聞き手にどう問題意識をもたせ、行動の変容を働きかけるかについて、現在、生徒は試行錯誤を重ねている。



PROFILE
2016年JICA 教師海外研修に参加。2017年・2019年国際理解教育プレゼンテーションコンテスト（国際交流協会主催）において指導するチームが最優秀賞を受賞。

アートマイル 国際協働学習 プログラムの 学びを世界へ

坪内昌子

(京都市立高雄小学校校長)

○ ESD教育を学校の場で

本校は、京都市右京区の山間部。京都市内より周山に抜ける国道沿いに位置する。校区は南北に8キロと広いが、面積の多くが山で住宅面積が狭く、居住する人は年々減少傾向にある。児童数は各学年単級で83名の小規模校である。

校区には平岡八幡宮・神護寺・高山寺・西明寺と国宝級の神社仏閣があり、京都市の中でも二番目に多く国宝を有している校区で



ある。校内には平安時代から続く歴史・文化が多数存在し、高山寺から寄贈された「鳥獣人物戯画」が掲示されている。以前は「高雄」と言えば紅葉狩りに訪れる観光客が多く、観光バスが行きかう場所であったが、観光客は減り、昔の賑わいはなくなっている。そこで、校長として学校運営を行うにあたり、「この歴史と文化を何とか次世代にも残し、高雄地域を発展させたい」と思い、生活科・総合的な学習の時間の単元計画を見直し、ESDを中核に据えて構成することの必要性を感じた。その為には、高雄地域の現状を把握することから始めなければならない

と思う、神護寺の神主のお話を伺った。更に5月に行われる国宝の虫干し、11月の『和氣清麻呂公の法要』に参加することで高雄の歴史と伝統を肌で感じた。次に、鳥獣人物戯画をめぐるお話を高山寺で伺った。高雄観光協会《保勝会》の会長からは、観光客が減少しており、高雄地域を挙げての高雄の活性化を望んでいることを伺った。地域の方々の児童・学校に対する期待も大きく、高雄を誇れる児童をESD教育で育てることの必要性を校長として実感した。

○ 高雄再生プロジェクト

単級である本校では、人事異動で赴任してきた担任の先生が、一人で学年の生活科・総合的な時間の学習を進めなければならぬ。高山寺でのお茶摘みは新学期が始まって間もない5月の若葉が出てきた時。準備ができないまま梅雨を迎えてしまう年もあった。個人に委ねられた学習計画では、学校としての連続的な学習は進められないと考え、計画段階で教

員との協議を重ねた。最初の1年は私も教員も手探り状態で、なかなか思うように学習を進めることができなかった。

教員が、聞いたこともなかった「ESD・いったい何をすればいいのか分からない」と戸惑う中、「高雄に住み続けたい・高雄の良さを発信したいと思う子どもを育てましょう」これを合言葉に教員と一緒に地域を回り、学校での学習内容を伝え、協力を仰ぎ、地域を巻き込んだ学習を始めた。そして2年目の学習発表会では、児童が高雄の魅力を保護者・地域の方々に発表した。いままでの形式を変えて、児童が自ら原稿を書き、発表する姿は地域の方々にも感動を与えた。そしてより多くの協力を得、地域と共にESDを中心に据えた学校教育を実践することができた。

○ 学びの成果の発信を

児童が考えた「高雄再生プロジェクト」をどのように発信していくか。このことが各学年の総合的な学習のまとめとなるのだが、これには苦労した。高雄の良さを誰に伝えるか。どうすれば活性化するか。児童と一緒に頭をひねらせた。まず作成したのはパンフレット。作成したパンフレットを各寺社や役所の出張所に置いていただいた。更に人が多く集まる場所として、地域の方が行っている「高雄マウンテンマラソン」に出かけ、3年生はポスターを掲示し、5年生はカイロに高雄の良さをアピールするチラシを貼って、ゴールした人に手渡した。このように、少しずつではあったが高雄地域以外の人に学び

を発信していくことができた。児童は、学校・保護者以外の大人との交流で、多くの事を学んだ。相手意識をもって接することや自分の考えを正確に伝えること。これらは小規模校で少ない人との関わりしか経験していなかった児童の自尊感情を今まで以上に育てた。また、高雄マウンテンマラソンで他府県からの参加者に感謝の気持ちを述べられることは自己肯定感にもつながった。

○ アートマイル国際協働学習プログラム

学校教育の柱としてESD教育に取り組んで3年目。更なる発信の場を求めていた時に出会ったのが『アートマイル国際協働学習プログラム』であった。私が青年海外協力隊OV(OB・OGのボランティア)であったので、OV活動の一環として、JICA関西にも度々足を運んでいた。その時に私の目に飛び込んできたのがアートマイルの作品であった。「このプログラムに高雄の児童を参加させたい」すぐに学校にパンフレットを持ち帰り教員に話した。小規模校の良さはこんな事かもしれない。教員の全員一致で取り組むことに決定した。学年は6年生。「SDGsの取組を、世界に発信しよう！」新たな目標が決まり、教員の士気が高まった。児童が積極的に総合的な学習に取り組む、地域からの協力を得られるようになり、職員室が活気づく。ESD教育とは何かを自分なりに解釈し、教員が意欲的に行動を始めたことに校長として感動した瞬間でもあった。校長としては予算を計上し、取組内容を再確認すること。今までの積み重ねがあり、比較的容易にアートマイ



ルへの準備を行うことができた。

高雄小学校としての取組は、SDGsの17項目の中からNo.11「住み続けられる街づくり」を選択した。決定した相手国はハンガリー。お互いに交流を進める中で、高雄地域に生息する絶滅危惧種である「モリアオガエル」を採り上げ、ハンガリー国で守ろうとしている絶滅危惧種と手を握る。モリアオガエルのバックには高雄の自慢すべきもみじを中心とした景色を配置した。この取組を始めてから相手国と英語での挨拶を交換し、お互いの国の理解に努めた。今までにない笑顔で英語を話す6年生の姿も印象的

であった。現在壁画はハンガリーへと旅立っている。壁画が完成し、高雄に戻り、さらには2020年のオリンピック・パラリンピックに掲示されることを児童と共に心待ちにしている。「楽しい」「もっとやりたい」児童の素直な感想である。今までの学習の成果を海外に発信できる。この活動に取り組む児童はいつも笑顔であった。「やらされている」学習ではなく「自分たちで考えて発信している」自信にあふれた児童と教員の姿は今まで3年間の学習の集大成であったと言っても過言ではない。また、6年生が意欲的に活動している様子を見ていた低学年がこの活動に参加したいと言い出した。そこで、アートマイルの単独制作を行うことにした。相手国は「ギニアビサウ」初めて耳にする国名である。今、低学年の児童がこの「ギニアビサウ」の国の様子を調べ、壁画を制作している。児童が国際的な視野に立ち、高雄の魅力を発信することの意義は大きい。教員にもその意義が伝わり、みんなが笑顔になる取組である。是非この6年生の作品を卒業式に飾りたいと思いい、作品が返ってくるのを待っている。



青年海外協力隊平成元年度1次隊員としてホンジュラス国文科省に派遣される。現地では指導主事として小学校教師の指導を行う。帰国後、京都市立小学校に教諭として復帰する。平成28年度より高雄小学校に校長として赴任。現在4年目。

PROFILE

JICA地球ひろば見学レポート

大野南中学校の 平和学習

谷口友隆 (相模原市立大野南中学校総括教諭)



相模原市内中学校2校の勤務を経て、平成29年4月大野南中学校に着任、現在3年目で、学年主任を務める。担当教科は英語。平成29年度文部科学大臣優秀教職員被表彰者、検定教科書三省堂NEW CROWN編集委員、英語授業研究会理事。

PROFILE

大野南中学校では、3年間で系統立てた「平和学習」に取り組んでいます。3年生の修学旅行では、被爆

地広島に行き「平和」について考える時間をもちます。それを念頭に2年生の校外学習では、班別でテーマを立てて、東京とその周辺に存在する平和に関連する施設や博物館を訪れます。その中で、JICA地球ひろばを選び訪れた生徒は、設定したテーマに基づいて、世界の現状やJICAの活動、そして平和との関連について、主体的に学習する機会を持ちました。

SDGsや世界が達成すべき問題について、職員の方から直接ご説明をい



ただき、さらに生徒の質問にも丁寧に答えていた。大きな展示物に触れ、ゲームやクイズ、また民族衣装の試着など異文化を体験しながら、学びを深めることができました。

生徒はゴミ問題や教育をはじめとする世界の現状や課題、さらにそれらの問題がその地域の住民にどのような影響をもたらすのかを具体的に知り、少なからずショックを受けていました。そして、スタート地点として設定した「平和」という概念から、ゴミ問題、教育格差の問題、差別問題、食糧危機、水問題、などSDGsに達成課題としてあげられているような世界中の様々な課題とつながっていったようです。そしてその学びがそれぞれ自分の生活へと伸びていき、「平和」という言葉を単に「戦争状態でない」とするのではなく、「自分の意思で未来を決定できること」や、「個性を大切にできること」「自分一人だけでなく、みんなで創るべきもの」「世界中の子供が自由に生活で

JICA地球ひろば



基本コース「合計2時間」

体験ゾーンの展示見学「1時間程度」



地球案内人による体験談「1時間程度」または地球体験学習(グループワーク)「1時間程度」

JICA地球ひろばでは、学校の社会見学や、修学旅行、その他グループでの学習内容に対応したプログラム(無料/要予約)をご用意しています(対象:小学校高学年から一般)。具体的な内容・時間など、ご要望に応じて調整いたします。詳しくはJICA地球ひろばまでお問い合わせください。



食のゾーンJ's Cafeでは、大使館オススメメニューやフェアトレード商品の販売もしています。

きること」「幸せを周りと共有できること」など、それぞれの言葉で語れるようになってきました。今後は生徒がそれぞれ学んだことを踏まえて今の自分にできることを探す「平和に参加する」をテーマに学習を継続していきます。

英語教科書・学参とSDGs

伊藤悦裕 (株式会社三省堂 学参・教材出版部 部長)



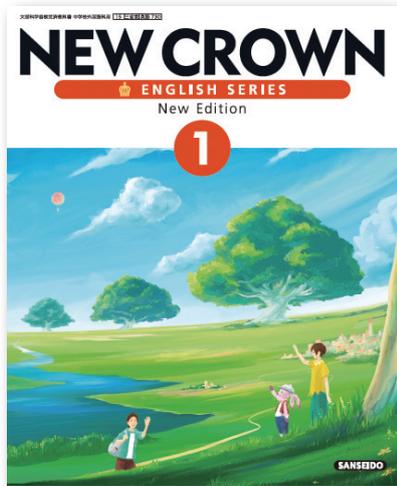
三省堂の歩み

学校でも、最近、SDGs（持続可能な開発目標）が話題になっているかと思えます。教科書や学習参考書の中では、これまでもSDGsで取り上げているテーマやターゲットに関わる題材を扱ってきています。

●英語教科書

弊社の中学校英語教科書『NEW CROWN』は、昭和53年の初版以来、題材内容を重視して編集されてきました。SDGsに関連した題材としては、これまでずっと取り上げ続けているものとして、アメリカ合衆国で黒人を中心とした人種差別撤廃のために力を尽くしたキング牧師や、広島や長崎に投下された原子爆弾と広島で被爆して亡くなった佐々木禎子さんなどがあります。

その後の版では、マレーシアの熱



帯雨林での森林破壊や地球温暖化、人間によって絶滅に追い込まれた動物、環境保護のためのエコツーリズム、アフリカの飢餓と報道などを扱っています。

現行版でも、1年生で車いすバスケットボールやゴールボールなどの障がい者スポーツ、2年生では介護ロボットやカンボジアでの地雷撤去、3年生では自らの発明によって貧困を克服したアフリカの少年など、各学年でSDGsに関連した題材が取り上げられています。

弊社の高等学校英語教科書の展開としては『CROWN』『MY WAY』『VISTA』の3シリーズがありますが、『CROWN』シリーズでは食品ロスを減少させる取り組みや飢餓への対処としての農業、砂漠化と水資源の問題、「国境なき医師団」の開発途上国における活動、アフリカで退役兵士の就業支援をする日本人女性などを取り上げています。『MY WAY』シリーズでは開発途上国への持続可能な農業支援や海洋ごみ削減への取り組み、生物多様性の維持、核兵器の廃絶に向けたスピーチなどを扱っています。『VISTA』シリー

ズでは絶滅危惧種の動物の保護などを取り上げています。

●学参(学習参考書)・教材

学参・教材では、まず『SDGs 英語長文』があげられます。SDGsに関連した英語の長文を読んで理解を深め、自分自身の問題として表現する活動を取り入れた教材です。(詳細は下記をご参照ください)。

それ以外では、準教科書という位置づけの『CROWN PLUS』シリーズがあります。LEVEL1からLEVEL4までありますが、題材として「子どもの権利条約」について紹介したり、環境問題に関してレイチエル・カーソンさんを取り上げたり、日本で初めてエコロジイということばを使い、自然保護運動の先駆けとも言われる南方熊楠を扱ったりしています。

このように、英語教科書や学参・教材の中で、一貫してSDGsの目標として掲げられているターゲットに関わる題材が扱われています。

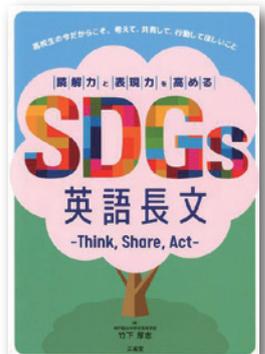
PROFILE

「いとう・えつひろ」1983年、三省堂入社。入社以来、教科書と学参・教材の編集に携わっている。中学校英語教科書『NEW CROWN』編集長を経て、現職。

『読解力と表現力を高めるSDGs英語長文』(三省堂)

教科書からの発展として教材を紹介します。

本教材は、SDGsを学びながら、英語の読解力と表現力を高めることができます。SDGsのテーマに沿った長文問題を通じて、いま世界で起こっている諸課題を知り理解を深め、さらに、表現問題を通じてそれらの課題を自分自身の問題として捉えます。本書はパート1とパート2から構成されています。パート1では、SDGsに関する諸課題(本書では、「水」「パーム油」「プラスチックゴミ」「難民」「地震」「ジェンダー」)について基本的な背景・知識を学習し、パート2では、それらについて、より理解を深める発展的な学習を行います。巻末の資料編には、SDGsで掲げる17の目標と169のターゲットを日本語と英語で紹介しています。



本体750円+税
B5判:112頁

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SSD 三省堂

三省堂教科書・教材サイト <https://tb.sanseido.co.jp/>

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL (03) 3230-9411 (編集)・9412 (営業)

- | | | |
|--------|--------------------------------------|--------------------|
| ●大阪支社 | 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地2-5-3 | TEL (06) 6341-2177 |
| ●名古屋支社 | 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31 協和丸の内ビル2F | TEL (052) 953-9211 |
| ●九州支社 | 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 | TEL (092) 531-1531 |
| ●札幌営業所 | 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15ビル3F | TEL (011) 616-8722 |